

中 支

中国大陆に戦つて 以德報怨

福井県 稲井田 一 二

昭和二十年十月十五日、当時私は南京の揚子江岸の捕虜收容所に日本軍の一捕虜として、何時祖国に帰還出来るか、不安と空腹の收容所生活でありました。南京市街のたれ幕に「解放八年の苦痛開放完了蔣主席万歳」と書かれている。

当時中国国民は歓喜に満ち溢れていた感がする。蔣総統は南京帰還第一声に、

「中国大陸二百万の日本将兵に告ぐ、貴方達の生命

財産と日本帰還は、私が保証する。速やかに日本へ帰還して復興に努力してください」

というものだったと記憶しています。聖人孔子の思想、忠恕と仁の精神をもって、

「仁は人を愛する。徳を以つて恨みに報ゆる。」

蒋介石総統はこの思想により我々を遇したのであると、今も肝に銘じています。

私は、同時に昭和十七年十二月、現役兵として入隊し、第一百十六師団（風兵団）第二百二十連隊での教育訓練・戦闘・転属・捕虜・復員までのことを忘れることが出来ません。

当時、一兵卒で上層部の作戦の詳しいことは知らず、ただ命令に服従し、無我夢中で戦い、九死に一生を得て無事帰還出来たことを感謝し、回想しながら断片的

ではあるが後世に語り残したいと思います。

― 現役入隊と現地での初年兵教育の様子は如何でしたか。

敦賀の中部第三十六部隊に十二月十日入隊、二十一日未明、敦賀駅から軍用列車に乗る。一体何処へ行くのか皆目わからない。やっと着いた所が下関で、駅近くの波止場からいよいよ乗船である。一体この船は何処へ行くのだろうか、内心不安が一杯であったので小声で船内食堂のコックに聞くと、いとも簡単に「朝鮮の釜山まで」と応えてくれ皆はホッとした様子だった。船で釜山へ、岸壁の棧橋の所から大きな列車に乗車しても何処まで行くか誰一人も知らない。広野を走る、地平線に牧羊群が見える、まさに大陸の感じであった。何処か知らぬが、大きなホームに入ると、所々に箱が置いてあり、飯上げの高梁飯が盛り上がっている。列車が入ると、大陸特有の砂塵が舞い、それが高梁飯に混る。空腹のせいも皆飛び付いて食べる。今考えてみると不思議な感じがするが、諺に「猫と人間は賢沢を覚えたら止めにくい」。今の世代は物の有難さがわか

らぬ世相となっている。

何時の間にか奉天駅に着く。(列車歩哨はもう防寒具に身を固めている。実に寒い国である。) 朝鮮、満州を越えたように列車が止まったら

「天津・テイエンチン」

とアナウンサーの声である。

敦賀を出発してもう六日になる。足はむくれ編上靴に足が入らない。我々初年兵を敦賀まで受領に来た下士官が言う、

「軍隊という所は靴に足を合わせる処だ。」

そんなことを言われても足が入らない。「何と不合理な訳のわからぬ無茶なことを」と反発を感じる。

終着駅は浦口。対岸の南京に渡り、揚子江を溯り安慶着。作戦帰りの古年兵と再度乗船。古年兵と馬は船内、初年兵は甲板である。十八年一月、安慶の冬も日本の北陸と変わらぬ寒さである。

出航すると寒さが身にしみる。昼食の飯もおかずも凍って箸もたたず、ホークも曲がってしまう。半日の航行だが骨の髄まで冷える。

着岸した所が連隊本部のある池州である。岡田中隊は我々初年兵を入れて、二百名位である。最初に言われたことは、

「中隊長はお父さん、准尉はお母さんである。古兵は兄だ、困ったことがあつたら先ずお母さんに相談せよ」
であつた。

初年兵は一・二班に各二十名。いよいよ兵舎での初年兵教育が始まつた。起床六時、消燈二十一時までの日課で、其の間初年兵は一分と休む時間はない。起床と同時に厩（ウマヤ）に走り馬の寝糞を出して馬の手入れ、水飼い、飼い付けで約一時間。其の後朝食前のリンチ、初年兵は馬より価値が無いと上等兵は言う。馬は兵器、兵隊は消耗品である。

日課は、朝、馬の手入れ、四十一年式山砲の手入れ、三十八年式歩兵銃の手入れ、兵舎外の清掃、訓練学課、食前・食後・消燈前のリンチ、夜は不寝番と全く寝る時間が少ない。その上四六時中空腹である。夕食時は毎日の如く飯を前に飾つて正座でリンチである。点呼

五分前位にまたリンチである。やつと食事にありつく、喰う時間は一分位。

点呼後やれやれと思つているところへ上等兵が、舎後（兵舎の後）の整列を呼び掛ける。就寝前で服は着ていない、襦袢袴下（シャツとズボン下）一枚で震えながらリンチをうける。三月とはいえ雪がちらつき非常に寒い、訳のわからぬ事を言つて消燈までリンチである。滅私奉公の覚悟で入隊したが、余りのリンチで消燈後初年兵一同は毛布をかぶつて男泣きに泣く。

日本帝国の軍人精神を育てるためとはいうが、半分は上等兵の私的感情での行き過ぎで心身共に疲労困憊である。

五月、一期の検閲も終え、ここではじめて二等兵として認められ各班に配属されるが、此処でも初年兵は生意気だと、またリンチである。

――衡陽の前の長沙攻略戦も大へんでしよう。

ようやく一人前になつた初年兵も、十八年八月、常德作戦参加、私の愛馬「霜榎号」は戦死、五カ月にわたる作戦行動も終了し武昌付近に駐留したが、私は十

九年一月三十日付けで第三十四師団（樁兵団）第二一八連隊に転属となつて、いよいよ湘桂作戦が発起したわけである。

五月二十九日の新市攻撃では、我々歩兵砲隊では相当の死傷者を出し、続いて長沙対岸の岳麓山攻撃に参加した。丁度、内地の梅雨のように、しとしと雨が降つた。真つ暗闇の中を砲を分解搬送してぐるぐる山の中を回ること二日間、道路は右にも左にも地雷が埋めである。先頭の誰かが地雷を踏んで「ドーン」と地響きがする。兵隊二・三名が吹き飛んで、片足・片手が落ちて来るといふ困難な進撃である。

六月十五日牛型山の陣地に夜間攻撃を敢行、遂に十八日朝、岳麓山を占領し長沙は陥落した。重砲・山砲・機関銃・小銃や資材など多数捕獲し、捕虜は何千名だったという。

過去三回の日本軍の長沙攻撃は相当な犠牲を出しながら三回とも失敗している。長沙の中国人も中国軍も、四回目も日本軍は敗北すると信じていたに違ひなかつた。

長沙駅に殺到した市民が、列車の屋根にも鈴なりになつて避難する風景を見ながら、我が第二百十八連隊の砲隊も、非戦闘員に撃ち込むことは出来ない。一人でも多く乗り、一分でも早く列車が発車することを祈るのみだった。

長沙城に対して、在支米軍機二、三十機が連日爆撃し、無傷で陥落した街は二日間で廃墟となつてしまつた。

私たち歩兵砲隊は、分解搬送で鉄道線路に沿つて、次ぎの目的地衡陽へと進撃を始めたのだが、線路の両側の馬と重慶軍の死臭が鼻をつくし、米空軍機の機銃掃射を執拗に受けながら、泉溪市という所に突入することが出来た。

衡陽攻略は湘桂作戦中でも、最も激戦で、第一次・第二次・第三次とあつたのですが、各兵団は随分苦戦したので、その状況を。

昭和十九年六月二十四日、軍公路を強行軍して、二十四時、対岸の衡陽城は炎上しているが静かである。歩兵の一個小隊が工兵の舟艇で渡河準備している。歩

兵の一個中隊は既にトーチカ攻撃しているが抵抗激しく攻撃が進捗しないようだった。ここで砲を撃つたら敵の集中攻撃を受ける。歩兵中隊に早く後退するよう指示しても、工兵隊は後退してしまい、渡河することが出来ない。こちらは犠牲者が続出しているが救援隊も来ず、四、五日釘付けでやっと脱出に成功した。

六月二十八日、敵の堅固なトーチカへ砲を撃ち込んでも全然受け付けない。

対岸の敵陣地から夜明けと共に、重慶兵が一、二人トーチカを出て湘江へ水を吸みに降りてくる。そのトーチカをよく見て砲を打ち込むが、完全に要塞化され受け付けず、仕返しに十数発射って来る。

こんなことが四、五日続いたが、我が方の弾薬は後方から補給がつかず、一発の無駄も出来ない。対岸の飛行場は占領したが、日本機の着陸はない。依然として上空からは米空機が離れず攻撃してくる。

七月のある日、蒸水を再び渡河して重慶軍特火点を急襲してこれを奪い取り、遂次陣を攻撃するが、守備兵は頑固に抵抗して前進が出来ない。弾薬は射ち尽く

してしまい、他の連隊と弾薬の貸し借りの状態が何日続く。

制空権は完全に米軍に握られ、丘に壕を掘ってこちらも抵抗線を設けて夜になるとその中で寝るのだが、食糧はない。夕方になって背後から敵は迫撃砲と機関銃の集中射撃をする。二キロ程後方の山の斜面から敵が怒濤のように攻めてくるのが見える。急拠、山砲を後方に向け発射して陣地を撤退し、包囲して来た重慶軍を蹴散らすこと三日間、やっともとの攻撃地点まで進出することが出来た。

―今までが第一次ですね。第二・第三次の攻撃についても続いております。

第二次総攻撃に参加のため西門の西方三〇〇メートルの地点までは突進するが、敵は執拗な抵抗で死守していて、衡陽城は陥ちない。ただ犠牲者が続出するのみである。食糧が無いので、キリスト教会の池の鯉を獲り、三日間も主食代りに食べる。米空軍は落下傘で食糧・弾薬を連日投下しているから、重慶軍は戦力が衰えない。しかし、敵・味方の戦線が接近している所

では、落下傘が日本軍の方へ落ちて来た。久し振りでアメさん給与と喜んで拾ったら機関銃の弾で一同がっかりした。落下傘は絹なのでせいとくなくタオルだと、お互いが分け合うこともあった。

食糧は相変わらず何一つない。連日の戦闘で栄養失調や、マラリヤ患者が続出する。米軍機は陣地上空を旋回して、日本兵の姿が一人でも見えれば機関銃掃射の雨である。そのため戦死する者も多かった。軍服はボロボロで乞食同然、靴は穴があき、止むを得ず戦死者の少しでもましなものがあれば、着替えたり、履き替える日が続いていた。

我々の砲隊は、何時の間にか、私の古巣、嵐部隊の第二百二十連隊の指揮下に入って、第三次攻撃準備のため、陣地移動を行い、ワニ高地という岡の下の軍公路に到着した。その瞬間連隊長は戦死された。上空を珍しくも友軍機が旋回しているので誤爆されてはと思、大急ぎで日の丸の旗を振って友軍機に知らせた。ワニ高地で、第二百二十連隊歩兵砲隊の旧戦友と逢った時は、お互いに皆やせ衰え、白く光るのは眼だけ、

真黒な顔をして実にあわれな姿であった。口をきくことも出来ず、戦友の話も聞けず、目と目での合図のみの悲愴な逼迫した状況で、これで死に別れをした者もいたはずだった。私たちの砲隊は直ぐ第二百二十連隊の左翼となり、陣地を攻撃するが、敵は頑強に抵抗を続け前進は困難だった。

八月七日夜半、自分は決死隊の一員となる。手榴弾一発と短剣で、山砲は分解搬送で一軒の寺に潜伏、

「明朝の総攻撃の準備をせよ。」
と命令が下達された。

「敵は三方にいる。静かに寺に砲を据えよ、他に歩兵一個小隊と機関銃一個小隊を同行させる。如何なる理由があろうとも帰るな。」

の命令で、我々は静かに前進した。

八月八日午前三時、どうやら一軒の寺に辿り着いた。砲身の所の煉瓦をメートルほど崩す、作業中の捕虜は敵に見つかり狙撃され、何人かが死んだ。窓の外の立ち木を切らせた捕虜も、自分達の仲間狙撃され三人死んでしまったが、これでやっと攻撃準備が完了。

後は通信隊よりの総攻撃命令を待つのみとなった。

夜が白々と明けて来た。寺の前では歩兵の決死隊の小隊長が

「日本軍人として花と散るのは今である。」

と悲愴な訓示をしていた。山砲は零距離射撃（弾が砲口を出るとすぐ直前で破裂する。）で弾薬は百発位、信管をつけて待った。

午前五時、いよいよ命令下達、第一発射、第二発射と次々に撃ちまくった。敵が塹壕よりはい登り、丘に上がって敗走するところを、我が機関銃の乱射で敵は狼狽する。歩兵の決死隊は銃剣突撃で突進する。難攻不落の衡陽の陥落は目前に迫り、将兵一同歓声を上げた。

その時、突然ドカンと大音がした。「ガス・ガス」と叫ぶのが聞こえた。何処からか敵はガス弾を我が砲側に撃ち込んだ。その時、兵三、四名戦死と重傷であった。機関銃小隊長は戦死した。自分は丁度、砲側を離れて弾薬を取りに行ったため、一瞬のことで助かった。

丘の上に日章旗が翻ったのは、六月二十二日以来四十何日か目、衡陽は遂に陥落した。想像に絶する悪戦苦闘の毎日だったが、やっと陥落して、この時はさすがに将兵皆感涙の一時だった。敵ながら天晴、良く死守したものだ。我が部隊員は約半数になってしまった。敵捕虜は大西門の軍行路を八列とも十列ともいえぬ縦隊で、両手を上げて続々と降伏して来た。捕虜の員数を点検しろと命令を受けたが、敵も相当苦戦したらしく、私物一つ持っておらず丸裸同然で実にあわれな姿だった。軍公路の広場へ出来るだけまとめておけていることだったが、約七千八百名位だったかと記憶している。その時、米空軍機の機銃掃射で何十名かの捕虜が死に、気の毒に思った。（今までの味方に射れた訳）

衡陽の重慶第十軍々司令は方先覚將軍だったのですが四十七日間守ったと、重慶側の手記にあります。その後第二百十八連隊と貴方はどうになりましたか。

衡陽が陥落してから、私は連隊の軍医に呼ばれ、

「貴様はこれ以上部隊と行動をしたら命がない。今と命ぜられた。其の時の自分の姿は、これ以上瘦せられない位栄養失調で眼はくぼみ、急に歩行困難な状態になっていた。後退の道中、道の両端に負傷者のうめき声、傷口には蠅と蛆虫が一杯である。何とか助けたくても自分自身も心身共に疲労困憊で、ただ一心に野戦病院に辿りつくのが精一杯であった。」

やっと後退し附近の一軒家に収容された。これが野戦病院である。入口で部隊名と現住所・本籍地を書くだけで、水一杯も吞ませてくれない。勿論、薬とか負傷者の治療どころではない。ただ、土間にごろ寝である。負傷者の傷に蛆がわいている。このままでは死を待つようなものだった。

一日目に兵一人が死んだ。残った五人力を合わせて、何とか食糧調達をしなければならぬが、歩行困難者ばかりでどうすることも出来ない。その中で元氣のある兵二人で、五人分の食糧を徴発するのである。いざる様にして近くの田圃へ行き稔った稲穂をやっと取って

帽子の中に入れ、一日に二人がかりで二合程の米を作る。これを塩気のないオカユにして患者五人で分けて食べた。僅か二合程のカユを作ることが患者にとつては重労働である。その日、また一人死んで残りは四人となった。

自分は十日程後、前線へ弾薬輸送に來た自動車は後方へ補給に帰る時、幸に便乗させてもらった。夜間はライトを消しての後退である。軍公路はゲリラによって切断されている。そこに落ち込んだら前進も後退も出来なくなる。そのうえ、米軍機が執拗なばかり機銃掃射する。

自動車の後退も困難で、衡山を経て易俗河まで、昼間は山中にかくれ、食糧調達するが、食糧らしい物はない。ニラを取ってゆでて塩なしの主食（岩塩も貴重品で仲々手に入らない）。なつめを取って食べて、どうにか一週間後、易俗河に到着した。

ここではじめて衛生兵の指示に従い、少量の米食にありつくことになる。一週間休養後、チャンク船に患者六名乗り、夜間に湘江を帆を揚げて出航する。昼は

河岸にひそみ、夜航行の繰り返しである。長沙まで一人、洞庭湖に入ってまた一人死亡する。二人の遺体を湖畔の砂浜に埋め、髪と貴重品を遺品とし、草花を立て、僅かな煙草を練香がわりに燃やし、戦友の冥福を祈った。次ぎに死ぬのは誰だろうか、お互いに心の中で思いながら顔を見合せて目を閉じてしまう。

—ようやく、日本軍の原駐地にたどり着いたわけですが、作戦中は、患者収容所も野戦病院も兵站病院も、その様な状態でした。

入院させても、返って伝染病にかかり死亡する者が多かったのですが、その後はどうになりましたか。

衡陽出発以来二十五日、どうやら岳州に到着した。四、五日休養し列車で武昌に到着した。武昌駅ホームには、在留邦人の愛国婦人会と白衣の看護婦が、我々患者一同に「御苦勞様・御苦勞様」と迎えてくれた。約二年振りに日本の婦人を見て、嬉しいやら有難いやら感謝の気持ちで一杯だった。ホームで先ず砂糖水一ぱいと蜜柑の缶詰を少々、その場で食べさせてくれ、

実に有難かった。

救急車で武昌第一陸軍病院に到着、全部裸になり着・白衣と一切着替えさせられた。軍医は「野戦から病院に到着した晩は、やれやれと思いいのゆるみから半分は死んでしまう。入浴したいだろうが今晚は禁ず。気をしっかり持て。」と訓示された。

四月以来半年の間、着のみのままの野戦生活で、入院して日本軍人の有難さをしみじみと身にしみて感じた。それから各病院に後送、休養をさせられつ、徐州近くの陸軍病院でさらに三ヶ月静養、全快し、やっと退院することが出来た。

それは昭和二十年二月の初めて、退院と同時に武昌の留守部隊を追及し、武昌警備三ヶ月。戦局悪化のため、中支軍主力は、中国大陸の上海付近への連合軍上陸を予想し、戦闘準備に移ることになったと聞く。本隊の第二二八連隊は江西省九江の南西の田舎町へ駐留したので、ようやく合流することが出来た。

終戦時の思い出はいろいろある。私達は、連隊本部付近の丘の上で分哨勤務をしていたが、「日本が負け

た」のニュースが入り、「そんな筈はない」とお互い信じなかった。ところが、敵将が本部の歩哨線を突破し、我々の部隊兵と武器弾薬を即時渡せと言う。連隊長は、

「負けたとはいえ、日本帝国軍人である。派遣軍の命令無い限り渡すことは出来ない。若し不服ならここで貴殿の部隊と今から一戦をやる」

と力をいれ述べたところ、敵將校はすぐご帰っていったそうだ。これは共産軍であつたらしい。

駐留地の敵の状況に不穩の動きがあるので、連隊はこの街を撤退する。予想のように、背後から送り狼のような部隊が追尾してくる。常德作戦撤退と同じ繰り返しであつた。その時、落伍者二十五名程が敵に拉致されたらしい。この部隊は毛沢東の共産軍部隊（新四軍？）らしい。あの時、連隊長が毅然として、敵の申し入れを拒否しないで、兵や兵器を渡していたら、今頃は毛沢東の兵となつていたかも知れない。

以後、南京まで行軍、中国將兵や良民との交流や、不良中国兵の略奪など、敗軍の兵としていろいろ忘れ

られない経験をして、上海出帆は二十一年二月だが、何処の港に着くか不安の日々であつた。

四日目の朝、甲板より島々が見える、松の木がある。間違ひなく日本である。皆甲板上で抱き合つて泣いて喜んだ。顧みて三年三ヵ月になる。毎日夢見た祖国日本、九死に一生を得ての帰国、その感激は一生忘れられない。

二月十日、無事佐世保港に上陸、復員することが出来た。はじめに申した通り、三年余の中国戦線での体験の中、蔣主席の

「以德報怨の精神、慈悲にして寛大なる精神」が中国国民一人一人に脈々として伝わっている感を持つている。

初陣の常德作戦

三重県 浜口 敬治郎

私が久居の連隊に入隊したのは、昭和十七年の暮も